

遠い声

有森 信二

建物中が身震いするほどのショックが、二度目にきたとき、邦彦は初めて地震であることに気付いた。

浴槽の湯が、いったん胸元を引き浚ったと思うと、今度は打ち返す波となって戻ってきた。波は浴槽の縁を越え、床に跳ね、激しい水音をたてた。

窓ガラスがきしんだ。湯気に煙った天井の灯りが、一瞬明滅した。邦彦は浴槽を飛び出し、バスタオルを掴むと、裸のまま半ば開いたドアを蹴って、ルームに駆け込んだ。

テレビをつけた。

画面には、気球が浮かんでいた。地震のテロップは流れていない。地方の熱気球大会を伝えているらしいアナウンサーの表情にも、声にも興奮の様子はなかった。

河川敷を飛びたった数十の赤や黄の気球が雲一つない空に舞い上がり、どこか見覚えのある山の形の頂上あたりに小さな影を落としながら、再び元の河川敷に次々と下りていく。

カメラは、赤と黄の一際鮮やかな縞模様の気球をズームで追い、十七か国からの招待選手をまじえて大会はいつになく盛り上がったと、ゆったりしたテンポで伝えていく。

いつの間にか、揺れは止んでいた。

天井から下がった照明の、中心へ向かうわずかな動きだけが、いまの衝撃が嘘ではなかったことを物語っていた。

レースのカーテンを透いて、街の灯が見える。なにごともしなかつたかのごとく、窓いっぱい灯をともした高層ビルが正面に立ち並び、その谷間を自動車がのろのろ行き交う。

高層ビルの向こうは、ぼんやり靄っている。靄に包まれたあたりは、ときどき外国船が停泊していることのある港である。

熱気球の画面が陶磁器展に切り変わったとき、チャイムが鳴り、テロップが流れた。

マグニチュード五、この街の震度は三、震源は西北方四十キロあたりの海下と推定、津波の心配はない模様、という字面が二度流れて消えた。

あとは陶磁器展の様子がくどいほどに説明され、それもその筈で、放映しているテレビ局が展覧会を主催しており、会期は二週間、という字幕が、地震のテロップより長く画面の半ばを占めていた。

スイッチを切ると、邦彦は肩や胸に伝う水滴をバスタオルで拭き、

煙草に火を点けた。一口目の煙を、消えたテレビの画面に向かつて吹きつけると、裸のまま洗面台に立ち、鏡の前の錠剤を、まだ煙の残っている口腔に放り込み、前歯で噛み潰した。

いがらっぽい舌先に、どろりと甘く、そして苦い後味の悪さが残った。

いつもこうである。

この仕事に就いてから、いや、いまの仕事に手を染め始めてから、邦彦は、眩暈と、首筋から頭部にかけての得体の知れない膨満感に悩まされることになった。

それは、時間場所を問わず頻繁に起こるのであるが、仕事を目前にしたときは症状が特に著しい。

ホテルの階段を踏む足先がふいに感覚を失い、階下に真っ逆さまに叩きつけられる思いに、あわてて手摺りを握りしめることなどはいいほうで、歩いている道がぐにやりと波打ち、自動車が、街並みが、標識が揺れ踊る。

そんなとき邦彦は、目を見開いたまま突っ立ち、波打つ道に弄ばれながら、同じように揺れ踊る壁や塀に、ただ必死にすがりついている。

眠っているときさえ、自らが手を染めたということを忘れていない。頭の芯のどこかが、覚えていいるのだろう。うつらうつらし始めた頃（どういうわけかその時間に多いのだが）、耳の下あたりが膨らみ始めた気配に目覚め、寝返りを繰り返しているうちに、後頭部が熱をもち、脈が音をたてて打ち始める。

その音は、だんだん頭中を叩きつける激しさで鳴りだし、あまりのことにシーツをひき絞り、喉を掻きむしって、呻き喘ぐ。

「誰でも一度や二度は、腸が引き千切られるぐらい悶え、のたうつもんだ」

ボスの江藤がそういういいながら、社の勤務医だという内科医を紹介してくれた。

医師は最初散薬だけをくれたのだが、いまでは五種類の錠剤をくれる。邦彦は、片時も錠剤を離すことができないし、ひどいときは二日分を一回に飲むことさえある。

洗面台の前でたて続けにコップの水を呷り、薬を流し込むと、邦彦はようやく自分がいくらか自分の体に戻った気がした。そうやって、鏡の中の血の気の引いた顔を覗き込む。

目の下はたるみ、染みに似た隈が浮き出、頬骨が尖っている。唇は乾き、青黒い。髪や髭には、まばらに白いものがまじっている。

これがいったい自分の顔か、とたじろぐほどである。三十六歳になったばかりなのに、どうみても一回りは上の顔に見える。

この仕事に就いて九年になる。九年の間、いったい何万粒の錠剤を嚙んだことだろう。

そして、幾十という人を闇の彼方に運んだことだろう。というより、どれだけ脇目もふらずに仕事にうち込んだのだっただろうか。

九年前の夏も終わろうとする日、邦彦は突然勤務していた保険会社の本社から、いまの組織に転出を命じられた。

名目は子会社に出向という事になってはいるが、この組織が、親会社である保険会社とどう関連があるのか、はたして「子会社」と呼べるものであるのか、いまに至ってもよくわからない。

第一、組織の構成がわからない。誰が、なんのためにこの仕事を始め、いったい何人が携わっているのか。

わかつていることといえば、組織のことを「会」呼び、邦彦と、邦彦いつもペアで行動する田村と、それを統括する役に江藤という男がいる、ということぐらいである。

ボスの江藤は、若い頃に格闘技で鍛えたらしい厳つい男で、殆ど邦彦たちの前には姿を現わさず、いつも電話一本で仕事の指示をしてくる。その江藤が、邦彦たちの生殺与奪の権を握っているらしい。

というのは、江藤の逆鱗に触れた場合にどうなるか。邦彦の前任であったSという男の最期を知るにつけ、そう思わざるをえない。

Sは、組織から逃げ出そうとして、ホノルル行きの飛行機に搭乗しようとタラップを上りきったところで、原因不明の痙攣の発作にみまわれ、滑走路に叩きつけられてしまった。

しかし邦彦の場合、本社から出向させられたことで収入は以前の十倍近くになり、おまけに定められた勤務時間というものもなく、平均して月に一度ほど、江藤からの指示を受け、指示どおりに動けばいいのだった。

指示を待つ間は、小さな旅行に出ようが、一晩でも二晩でも飲み明かそうが、全くかまわない。

電話が鳴った。

江藤からではない。江藤からの指示は、最初に一度入るだけで、その仕事が付くまで、途中で入ったことはない。その代わり、期限までに仕事が首尾よく終わらないときは、自分たちに対する一切の保証はない、ということになっている。

バスタオルを腰に巻きつけたままで、受話器をとった。

「やったぞ」

田村だった。

「やった。誰を」

「夕刊を見てないのか。立花商事会長、立花光一郎だ」

「立花」

「ああ」

田村の今度のターゲットは立花である、と聞いていた。そのタイムリミットは、確かあと五日ぐらいに迫っていた筈だった。

数回に一度ほどではあるが、邦彦は田村とペアを組まないときがある。仕事があまりにひどくたてこんでいるとき、あるいは仕事が比較的容易とみられるとき、などがそうである。

「立花は、居間のソファ―に座り新聞を開いたまま、家人が気付いたときにはこと切れていた。持病の心筋梗塞で、だ」

田村は、電話の向こうで低く笑った。

「立花は、業界では三本の指に入る大物だ。しかし、代表取締役の座を五年前に譲ってからは、ただの老いぼれでしかない。俺たちが近付くなど、た易いことだよ」

邦彦は、業界の重鎮である立花が、なぜわが会にアプローチする必要があつたのか、担当でない身には詳しくはわからないが、大方の察しはつく。

いつの頃からか、立花の心に秋風に似たものが立ち始めたのである。心の奥にこの秋風が立ち始めると、人々の多くは、なぜかその後ろを覗きたくなるものらしい。豪壮な家や土地、地位や名誉といったものをかなぐり捨て、後ろへ後ろへと、あてどもなく歩き始める。

「まずは、ご苦労さんだ。これで、しばらくゆっくり羽が伸ばせるな」

「そうもいかない。今月は、もう一つ仕事が残っている。なに、こつちもた易い部類だからな。それより、お前の方はどうだ」

「いつものとおりさ」

「そうか、いい首尾を期待してるよ」

田村は最後に少し鼻を鳴らし、二、三度軽く咳きこみ、電話を切った。

邦彦は、素肌に着用をはおると、ドアの隙間から差し込まれた夕刊を拾い、ベッドに仰向けに寝そべった。

流通業界の大御所、立花光一郎氏逝去、八十七歳、という見出しと写真が続いて、氏の略歴や業績が五段組みで報じられている。

遺産は五十億以上にのぼる見込み、という記事にも目がいく。喪主は立花商事代表取締役で長男の立花俊郎氏、とある。流通業界の重鎮としての、形どおりの記事である。過も、不足もない。

功なり名とげた男の幕を引くには格好の演出であり、一般の読者層には手の届きようもないことではあるが、それでいて許せない範囲を越えているものでもない。

会では、依頼人である契約者と、直接の担当者が顔を合わせるこ

とはないのであるから、田村が具体的にどんな方法を使ったのか、当の立花本人も知るよしはないことになる。が、こうやって記事として出された以上、依頼人である立花の思惑と、担当者である田村の行為とが首尾よく一致したことは間違いない。

つまり邦彦たちの仕事は、依頼主の要望に百パーセントの確率で応えることを要求されている、といえればその大方は当たっていることになるだろうか。

五種類の錠剤が効き目を現わし始めたのか、邦彦の体の奥で火照っていた渦巻き状のものが、ゆっくりとしぼんでいくのがわかる。しかし、こめかみのあたりにうずくまっているしびれは、相変わらず脈打つ音を伴い、頭蓋をちりちり穿つ。

夕刊をベッドの端に放り、弾みをつけて立ち上がった。首を回し、そして小さく伸びをした。

窓に寄る。真正面に聳えるビルの部屋の、それぞれの照明が、明るさを増している。照明の下には、腕まくりをして忙し気に動く男たちがいる。

午後七時をいくらか過ぎた。

邦彦の心のうちにこの二十日間来わだかまってきた思いが、また首をもたげそうな気配がする。その気配は、喉元を押し上げてくる吐き気であったり、縄目状に体全体がよじられていくような眩暈であったりする。

ちりちり鳴るこめかみのあたりを押さえ、軽く揉みほぐしてみる。しかし、いくら時間をかけて揉みほぐしたとしても、うっそりしたしびれが消え去ることがないことは、邦彦自身一番よく知っている。おまけに、いまの地震である。

今度の仕事は、ひよつとしたらうまくいかないのではないか、という思いが心の端をかすめていく。なぜか、そんな予感がある。

あのビルの向こうの、靄の一際濃く漂っているあたり。

夕闇がこの街を覆い始める時刻になると、邦彦は靄の一粒一粒までもを数えるふうに眺めやる。これを日課にするようになって、二十日になる。

「宮地敬三、八十二歳。K大学名誉教授で、日本近代経済学史の研究では斯界の権威。K大学経済学部長、日本近代経済学史学会長、K市の未来を考える委員会委員長など要職を歴任。十八年前の県知事選では、党派を越えた革新系の有力候補として名があげられる」邦彦の手元にある江藤から送られてきた資料には、宮地の経歴をそう記している。

江藤が示してきた仕事の期限は、あと十日後、となっている。つまり、命じられてから一月で、邦彦はこの仕事を完遂しなければならない。

仕事の期限はいつものケースとほぼ変わらないのであるが、「今度は、軽すぎるな」と、江藤は電話でひどく不機嫌だった。

江藤の場合、若い頃格闘技で鍛えたということもあってか、相手が手強ければ手強いほど闘志がわいてくるらしい。特に、政界や財界に強い影響力を持つ人物のときは、江藤自身が実際に仕事を遂行しているのではないかと錯覚するほど、背後に会の、いや江藤の息遣いを感じる。

「やっこさん、一人暮らしたから、な」

江藤はつまらなさそうにいい、一方的に電話を切った。

指令がくると、邦彦たちはすぐに行動に移らなければならぬ。

その日の午後の新幹線に乗り、この街に着いた。そうやって、会の方で予約してくれているホテルの部屋で、約一か月を暮らすことになる。

「第一条 本会は、正当な手続きによってなされた依頼人の意志を尊重し、その希望する期限までに、同人の生命を断つものとする」

「第二条 本会は、前条の実施に当たっては真摯にこれを行い、社会的混乱をきたすことなく、また、依頼人に肉体的、精神的苦痛を与えないものとする」

邦彦は、会則の冒頭に当たる部分を呟いてみる。

この部分を口にする度、いまだに全身が粟立つのを禁じることができない。

自分の手で闇に送った人々のそのときどきの横顔や、妙に澄んだ瞳や、病苦にのたうっていたときの姿が、一人一人蘇ってくる。彼らは、邦彦が手をくださったことということも知らねば、ひよつとして自分が闇の住人になったことさえ気付いていないかもしれない。

会では、依頼人のただでさえ敏感なアンテナに決して触れることなく、まして、依頼人の前にそれらしい姿で現われることを厳禁しているから（とはいえ、ときどき彼らのそれとわかっているのではないかとという目線に、雑踏のなかでふとぶつかったりして、冷汗を流したりすることはよくあるのだが）、直接彼らに姿を見られることも、彼らの肉体にじかにさわったりすることもない。

そうすることが「依頼人と会との契約であり」、また、「人を闇に送るという厳粛な仕事に携わる側の掟としなければならない」と、会則の条文は続く。

とにかく、邦彦たちは、刑事事件とまがう失態をしでかしてはならないし、なにより、社会の動揺を揺り起こすことだけはしてはならない。

この会に、いったいどのくらいの人が依頼人としてアプローチするものか、邦彦たち末端にある者には知るよしもないが、肌感覚

る感じでいえば、例えば、街の片隅の公園で終日空を眺め暮らしている老人たちの、五人に一人はその依頼者ではないか、と思ってしまうほどである。それほど、街は老人たちのどこか呆けたとしか思えない視線で埋まり、絡み合っている。

宮地敬三は、今朝は六時過ぎに起床して、いつものとおり家の前の歩道を往復で二キロばかりジョギングをした。朝食前のジョギングは、現役教授の頃からの習慣で、激しい雨や風の日以外には欠かしたことがない。

病弱だった妻を五年前に失ってからも習慣は変わらず、この歳になるまで病気という病気をしたことがない体は、現在でも二キロの道程など全く苦にしない。それより、早朝の真新しい空気を肺腑いっぱいに吸い込むことで、全身の末端の細胞の隅々まで新しい息吹を吹き込まれている感じさえする。

食事こそ、簡単な朝食のほかに自分でこしらえることはないが、わずかに十分ほど歩いたところにあるレストランのさっぱりした味付けが好ましく、この頃ではすっかり常連になり、敬三の姿が見えないときは、マスターから電話が入ることもある。

ひところは、正確に数えることができないほどあつた役職からいまはすべて遠ざかり、午前中は六十年の研究生活で集めた膨大な資料の山に埋まって過ごし、午後は気が向くと電車で二十分のK大学に赴き、名誉教授室のソファで三、四時間を送る。

名誉教授室を出て廊下を曲がると、定年まで三十数年間自分の城だった教授室があり、いまでは敬三の下で助手の時代から仕えてくれた明石の名札が掲げられている。明石は、敬三が大学を退くに当たって、後任として推薦し、教授会で満票の賛同を得て日本近代経済学史講座の教授に就任したのだった。

その明石が、いま学部長として学部の運営に当たっており、敬三のときに未解決のままだった、手狭な現キャンパスから郊外への移転計画に、敏腕をふるっているという。

教授室の前をそのまま奥に歩くと、図書室がある。その書架の一つには、敬三が発表した研究論集が発行順に並べられてあり、もう少し奥の五つの書架には、敬三が寄贈した研究書や資料類がぎっしり詰まっている。

今日も敬三は、名誉教授室を訪ね、そして図書室で自分の書架を眺め、ひとり帰ってきた。敬三にとって、この時間こそがなにもにも変えることのできない、珠玉にも等しい時間である。

もうひとつ、敬三は自分ひとりの心に留めていることがある。

自宅から五軒目の斜め前に、最近コンビニエンスストアが開店し、

殆ど終日店を開けている。敬三は、夕食が済んだあと、朝食のための材料の買い出しに、三日に一度は利用するのであるが、ときどきレジにいる髪の毛の長い子と目を合わせることもある。

相手はレジの係であるから、客と目を合わせるのは職業柄当然のことであろうが、材料を選びながら何気なく彼女の仕草を眺めていると、いつも客の一人一人と目を合わせているわけではない。どころかいくらか俯き加減に立ち、黙って小さく頭を下げるばかりで、ことばすら発しないことが多い。

だからといって、彼女が軽快なテンポで流れるBGMに逆らって、格別に陰気な存在であるかといえ、そうではない。

いつもまばらにしか客のいない、店舗の広さの割には少し淋しい店の佇まいのなかで、ほのかにいろどりを添えているのが、彼女なのである。

一月ほど前の、雨の日のことだった。敬三は、豆腐と牛乳と一束のネギを挿んで彼女の前に立った。

彼女は、敬三が近付いただけでさっと耳朶を上気させ、いくらか身を引き加減に敬三を見上げた。その丸く見開かれた目に、敬三の全身が映っている。

「どうかしましたか」

敬三のことばに我に返ったのか、彼女はあわててレジに向かい、釣銭を握ると、もう一度見上げた。

「私のことが、なにか」

ビニール袋に品物を詰めながら、敬三が彼女の目を覗き込むと、彼女は意外な強さで見返してきた。

「亡くなった父にそっくりです」

「私が」

「ええ」

「しかし、あなたのお父さんと、私なんかとは比べものにならないくらいお若い」

「それはそうですけど、そっくりなのです、とても」

彼女は敬三に渡す釣銭を握りしめたまま、瞬きもせずという。

並んで立つと彼女の背は、たいして大柄ではない敬三の肩ほどまでしかなく、それも幾分左方向に傾いている。その傾きを、カウンターについた震える左指が支えている。

最初、敬三は、彼女の精神のどこかが変調をきたしているのではないかと、彼女の頭の前からカウンターについた指の先まで、何度も眺めまわした。しかし、そうではないことは、彼女の目がはつきり物語っていた。

「五十五歳でした。残業で少し遅くなって、といっても十時をいく



らか過ぎたぐらいでした。電話が入ったのです、部下の人から。戸締まりをして会社を出たら、ほんのいままで一緒だった父の姿が見えない。先に出て待ってるからな、といい残して数分前に出た筈の父の姿がないというのです。部下の人は、ビルの五階の会社から一階までをエレベーターで降り、階段を降り、非常階段まで伝って降りながら、探してくれたのです。というのも、疲れを癒すためにちよつと一杯やろう、と父が出際に誘ったからだだったのです」

彼女、北野由美子は、オレンジジュースには手をつけず、二年前の秋の晩のことだという事件について話しだした。ジュースのコップに、水滴が筋をなして流れている。

雨の日のレジで初めて口をきいてから、三日目だった。

敬三がいつもどおり食料品を手にレジにまわると、レジを離れていた由美子が店長とおぼしき男に頭を下げ、小走りに戻ってくるなり、「お願いです、ほんの少しでいいですから話を聞いていただけませんか」と、息を弾ませる。コンビニエンスストアのすぐ裏手に、古い喫茶店があるから、というのだった。

由美子が左足を踏み出す度に、踏み出した方にわずかに体を傾かせるのを、敬三は奇妙な面持ちで眺めながらついていった。そのいくらか不自由そうな足を引き摺り、由美子は階段をのぼると、ドアを押して客のまばらな喫茶店に入った。

「父は、トイレで倒れていました。部下の人が父は先に出たものと思ひ、部屋の戸締まりを点検し、消灯して、施錠してしまった会社の中に、実はまだ残っていたのです」

「お父さんには、なにか持病でも」

「父は人一倍丈夫でしたし、それをいつも自慢していました。ですから死因にしろ、なにもわからないのです。そのことで、部下の人は随分な取り調べを受けたらしいのですけれど、結局疑う余地などなかったのです」

由美子は、そこまでいうと口をつぐみ、しばらく俯いていたが、やがて思いを振り切るように、「ただ」といった。

「ただ」

「お客さんを初めてお店で見かけたとき、あつと思いました。父が入ってきたかと錯覚したのです。顔も、歳も、背格好も違うのに、なぜかそう思ったのです」

由美子の父は、妻と死別して十年、男手一つで由美子を育ててきたという。

「父が亡くなる半年前のことです。私は、短大を出て、ある大手の出版会社に就職しました。父がどれほどの日を待ちわびていただろうと、心弾む毎日でした。それが、父は急に口数が少なくなり、食欲も落ち気味で、といってどこがどう悪いというわけではないの

です。ときどき、呼び掛けても返事をしなかったり、居間で新聞を読んでいるとき、いつまでも同じ紙面の字面を眺めてばかりいる、という具合なのです」

敬三は、これはまさに自分ではないか、と胸のうちで唸った。

その敬三の顔色の変化を目敏く見てとったのか、由美子が、「ごめんなさい、私、なにか見当違いなことばかり喋ってるみたいですね」と、頬を赤らめ、俯いてしまった。

「いえ、そのまま続けてください」

敬三は、由美子の目を覗き込んだ。

「父は会社人間でした。毎日残業で、たまの休日さえ、翌週や翌々週の契約をとるために、普段の日より早く早く起きて書類を繰っていました。楽しみといたら、あまり飲めないくせに、会社の人と一杯のお酒を飲むことぐらいで」

敬三は、冷えかけたコーヒを一息に飲んだ。コーヒの冷えて苦みを増した味が、ゆっくり胃の腑に染みわたっていく。

「ところが、私が就職してからというものの、残業の回数も減り、休日には私と一緒に食事に出かけたり、デパートに行ったりするので、かといって、どこか具合が悪いというふうでもなく、食欲が落ちたとか、仕事が嫌になったとか、そんなことはないのです。私の初めてのサラリーでお酒を飲んだときなど、まだまだ由美子に食わしてもらおう齡じゃないぞ、と自分の仕事の自慢話をさかんにしていました」

由美子は、オレンジジュースには手もつけず、テーブルに目を落としたまま、肩をすぼませている。

「母を十年前に亡くしましたけど、それが淋しくてガムシヤラにがんばってきたとか、ほかに誰か好きな人がいたとか、私が自立するまで耐えてきた、などというのも当たっていないと思います。勿論、これは娘の私の勘でしかありませんが。しかし、いま、お客さんに出会ったとき、アツと思いつたのです。父の表情は、お客さんと同じなのです。ときどき街のレストランやデパートの売場で見せていた父の目。それは私の方に向けられていながら、私の姿などちつとも映していなかったのです」

敬三は、由美子のことばを聞きながら、彼女の俯いた襟足からわずかに覗いている肩口の白さを、瞬きもせずじっと見詰めていた。

闇を、激しい音が裂いた。

デスクで鳴る電話の音だった。

電話は、十四、五回コールを続け、ストンと闇に吸われた。

が、また間をおかずに繰り返す。二十回あたりでいったん息を継ぎ、すぐに三度目が鳴り始めた。

邦彦は、ベッドからゆっくり半身を起こした。頭がぼうとしてい  
る。頭を中心部がコンクリートかなにかでうち固められたみたいに  
縮まり、そのまわりが前も後ろもわかたず回っている。

「女がいるのね」

玲子だった。

「いない」

「いいの、かまやしないわ、誰がいたって。あなたの勝手なもの。  
でも十回目の電話よ、今夜、これで」

「眠っていた」

「そう。すごく、眠りが深いのね」

「葉だ。知らぬうちに眠り込んでいた」

「いいわ。とにかく伝えたいことは、二日間お店が休みだから、明  
日の晩そっちに行く。それだけよ、用って。あ、ついでは、あなた  
の傍の女にもいっておくわ。大怪我したくないんだったら、二日間  
だけは消えておいた方が身のためだって」

電話は一方的に切れた。

邦彦は、受話器を握ったまま、壁に体をあずけ、立ち尽くしてい  
る。耳の奥に、いつまでもハスキーな玲子の声が残っていた。

玲子は、L地下街にブティックをもっている。

もともとこの店は、玲子の元の夫である高宮という男が副業でや  
っていたものの一つで、以前から玲子が店長として実際の経営をに  
なっていたのだったから、高宮と別れた後も、店の名前も従業員も  
変えずに、そのままいまも続けている。

「手切れ金にしちやあ安いものよ、全く。こんな店、あいつのポケ  
ットマネーをちよつとくすねさえすれば、すぐにでも手に入るんだ  
から。でも、高いものなのよね、自由の代償って。おかげで、東証  
一部上場の社長夫人の座を、あんなあばずれヌードダンサーのやつ  
に渡してしまったけどさ」

酔うと、玲子は、ケラケラ笑う。

「高宮のやつ、札幌らはたきさえすれば、クレオパトラとでも寝れ  
ると思ってるんだ。あんなやつは、そこらの馬か豚なんぞとでも寝  
てればびっぴったしなのよ、実際」

玲子にかかれれば、レジャー業界を牛耳る二代目社長で、マスコミ  
の寵児でもある高宮研輔もかたなしになってしまう。

L地下街の玲子の店は、高級専門店が立ち並ぶなかにあつて一際  
目を引く存在で、客層も最上質の部類を集め、売上げもかなりの成  
績を続けているのだった。

邦彦が最初、玲子と出会ったのは、五年前の夜だった。  
仕事を終えて、バーのはしごをし、看板間近の店で一人飲んでい

た。

「この近くに、靴屋さん知らない」

いつの間に入ってきたのか、若い女が邦彦の傍に立っていた。見ると、ヒールの一方の踵が折れているのだった。女はかなり飲んで、いるらしく、カウンターにつかまり、ふらつきながらやっと上体を支えている。

「靴屋は知らないけど、君のためにひとはだ脱ぎたい気分だ」

邦彦は、女を小脇に抱え外に出た。

すると女は、邦彦の腕のなかからスルリと抜け出し、傍の街灯に身を寄せ肩をすぼめていきなり笑いだすと、折れたヒールを脱ぎ、公園の芝生のなかに思いきり放り込んでしまった。

「大成功、バッチリだわ」

女は、バッグから踵の折れていないヒールをとり出して履き、水銀灯の輪のなかにスツと立った。

「ゲームなのよ、ゲーム。自分がどれだけについているか、試してみるの。カギは、いい男に出会えるかどうか、それが決め手ね」

玲子は、面白くないことがあった日には、よくこの手の悪戯をするのだ、という。

「でも、うまくいかなかった日は、生きてるのさえ嫌になるほど落ち込んで、それから三日間は殆ど最悪ね」

それほど深刻でもなさそうな調子で、スタイルのいい上体を大きく揺らしてみせるのだった。

玲子からは、月に一、二度、全く気分れとしかいいようのない電話が入る。そして、邦彦の都合も聞かずにやってきて、二日ばかり泊まり込んでいく。

それ以外のときは、どこかでヒールの悪戯などをして、結構気ままにやっているらしい。

邦彦は、窓にレースのカーテンだけしか引いていないのに気付いた。

いつの間にか、あたりには闇の色ばかりが深くたちこめていて、正面のビルの灯りも殆ど消され、繁華街のネオンも、間延びしたテンポで点滅している。

邦彦は、闇の向こうを透かし見た。

闇の下の、いく分翳りの濃い部分と見られるところに、宮地敬三の住む家がある。

邦彦は、あと十日と迫った敬三との契約期限のことを、この二、三日、苛立つ思いで数え過ぎてきた。

敬三についての、江藤からの資料は、アタッシュケースのなかにある。その内容は、何十回となく目を通し、諳じてしまっている。

仕事が終わった際には、これらの資料類はすべて江藤に戻し、一切の証拠を手元から消してしまわなければならない。

江藤からの資料のほかに、邦彦が自分の足で集めた資料もある。それは、大学ノート一冊分をゆうに越えている。

今朝も敬三は、朝六時に目覚め、日課になっている二キロのジョギングに出た。まだ暗い、朝靄の漂っている道路に下りたち、簡単な準備運動を済ますと、靄をついて走り出す。その後ろ姿は、痩せぎすの老人のものではあるが、冷たい空気を蹴って進む足どりの確かさは、とても八十二歳のそれとは思えない。

ジョギングが終ると、仏間の妻の遺影としばらく向かい合い、すぐに一人分の朝食の準備にかかる。

朝食の準備は手慣れたもので、いつも欠かさない味噌汁のほかに、二種類ほどの菜をつける。朝食は、ゆっくり時間をかけ、食後の茶もたっぷり二杯は飲む。

朝刊には、一面から丹念に目を通し、興味を覚える部分があると、長年の癖で、ハサミで丁寧に切り抜き、台紙に貼りつける。

それらの後は、午前中いっぱい、十畳の洋間である書斎に籠もり、六十年来積み重ねてきた、経済学史に関する古文書や資料の類を眺めやりながら時間を過ごす。

しかし、K大学退官後、四年ほど前まで全精力を傾けてきたが、まだ目標の半分にも達していない、敬三にとって、自分の研究の集大成ともいえる「日本近代経済学史論究」の執筆の方には、机の上に原稿用紙を広げたまま、手を触れようとしない。

書斎での敬三は、眼鏡の奥で、淡水のせせらぎを思わせる瞳と、きおり瞬かせるほかにこれといった動きもなく、ただじっと、肘掛椅子の背もたれに体をあずけている。

その敬三の瞳に宿っているものがなんであるか、邦彦には窺い知ることにはできないが、表情を見ていると、まるでどこか遠い世界で鳴る音楽に似たものが、現われては消え、現われては消えているのではないか、と思われてならないのだった。

敬三は、昼食を行きつけのレストランでとると、背広に着替え、家を出る。背広は、K大学教授時代に愛用していた布地もしつけもしっかりしたもので、銀髪に丁寧に櫛目を入れ、これも愛用のカバンを下げ、ゆったりと落葉の散った歩道を歩く。

電車で約二十分のK大学に着くと、名誉教授室に直行する。名誉教授室は、明石のいる学部長室の隣にあり、広さも、調度類の質も、学部長室のそれをはるかにしのいでいる。

いわば学部の中なかで最も日当たりのよい、最も静かな場所に名誉教授室はあって、それでいて、年に一度の開学記念式典に使用するとき以外は、誰も使わない。

名誉教授室は普段は閉ざされたままになっており、これまでの慣例では、引退した教授が大学を訪ねるということは皆無に近かったのが、敬三の場合、週に二回は大学を訪れ、その度に部屋を利用する。

接待に当たる若い学部長秘書などは、不満を露わに表情や態度に出し、ドアの開閉や茶器の置き方もぞんざいである。

「先生も、昔はああじゃなかった」

後輩の明石でさえ、他の教授たちの手前、そういわざるを得ず、明石自身にしろ、始終自分の行動を敬三に監視されているのではないかという思いで、気鬱なことこのうえもない。

敬三はといえば、百人ぐらいが入ってもおかしくない部屋の中央に一人いて、キャンパスに行き交う人の波を見下ろしながら、書架にキッチンと整理された紀要や、学会誌などの背表紙に囲まれ、夢とも現つともつかない数時間を過ごす。

こんな日常が敬三の殆どであったのだが、最近ちよつとした変化が起こった。

自宅近くにできたコンビニエンスストアに勤める、北野由美子との接触がきっかけで、能面みたいだった敬三の表情に、わずかではあるが血の色がさし始めたのである。

そのためか、三日に一度の割で通っていたコンビニエンスストアに、毎日顔をだすようになった。毎日顔をだすといっても、わずかに数分の間店内にいて、由美子と短い挨拶を交わすだけで出て行くのであるが。

邦彦のノートには、これらの調査の結果が日を追い、細かに書きとめられている。

トランキライザー、ペンタゾシン、静脈麻酔剤。

これまでの仕事で、邦彦が使ってきた薬物である。

勿論、邦彦は医師ではないから、直接これらの薬物を扱うことはできない。

看護師に札束を掴ませたり、某人物の名を語って医師の決断を一定の方向に進めさせたり、あるいはレストランの食事に一滴みの食塩を加えたり、その場その場で方法を使い分けるのであるが、邦彦本人と依頼人とは、決して一つの線上で交わることはない。

これは、会と依頼人との間の、厳粛な契約である。

邦彦は、敬三と会がとり交わした契約書に目を通す。学者らしく落ち着いた、一点の乱れもない筆で署名、押印がされ、「契約のとおり、速やかに処置がなされること、切に希望します」という付記まで加えられている。

邦彦には、敬三がこの契約に至るまでの事情や、契約書に署名す

るときに心境までは推し量ることはできないが、これほど明瞭に自分の意志を表示した例は、他に見たことがない。

その敬三に対し、邦彦はまだなんの手もうたずにいる。どういふわけか自分でもよくわからないのだが、いざとなると気持ちのどこかが妙に萎えてしまうのだった。

もつとも、邦彦は、自分の仕事について、ある確信に似たものを抱いている。

それは薬物を使うとか使わないとかにかかわらず、依頼人は、自分の契約した日には、自分の生命を消す術を自ずから会得するのではないか、ということである。それが、いったいどういう仕組みによるものであるかはわからないが、彼らは、間違いなく契約の、その日の早朝までには、この世を旅立っていく。

そうでなくては、契約成就率百パーセントという数字が残ることなど、とてもあり得ない、と邦彦は思う。

それに、彼らは、会の者との接触がないとはいえ、会の者がどこにいて、なにをしているか、実は、薄々とはあっても察しているのではないか、ということである。

書齋に籠もっている敬三の目が、ふと壁の一点（邦彦が潜んでいる方向である）に釘付けになったり、K大学のキャンパスで、かなり離れた車の中からすれ違う際にも、眼鏡の奥の遠くの目が、邦彦をはつきりそれとらえているのではないか、とギクリとさせられることが度々あるのだった。

この頃邦彦は、錠剤なしでは半日と過ごせない。

薬の切れ目には、足元が、壁が、目の前の建物が踊り始め、傾き、うねり、頭上から降ってくる。頭の芯が、刃物で刻まれているのではないかと思うほどに鋭く痛みだし、数えようもない早い拍動が、耳の付け根のあたりを打ち鳴らす。

そうしているうちに、体がすごいスピードで空高く巻きあげられ、と思うと今度は、星ひとつ見えない、いつものものかもしれない、前とも後ろともわかつかうことのできない奇妙な空間を、際限もなく墜ち始める。

「単なる気持ちの問題だよ。検査では、どこにも異常はない。まあ、いくらか疲労気味ではあるけどね」

かかりつけの医師はそう答えるばかりで、とり合おうとしない。そして、「いいか、この仕事は正当な契約によってなされている。

契約を履行する会の側では、社会的混乱を招くことのないよう、契約者が正当な自分の意志に基づいて行う場合に限り契約を結び、万一、政治的、組織的陰謀が絡んだものであったりする場合、あるいは本人が自分の意志を行使し得ないような場合には、会のチェック

機能がこれらをすべて弾き出すことになっている。つまり、この仕事は社会的にも、個人的にも、そう、医学的にもきわめて優れた、有用な内容をもつ、最先端の事業なのだ」と、江藤も及ばない弁舌でまくしたてる。

邦彦にしろ、自分が負の存在であるなどということ認めたくはないし、かといって自ら率先してこの道を選んだわけではない。

もともと普通の大学を卒業し、同輩たちと変わらない就職をした。あとは、小会社への出向という、辞令一つで動かされる、サラリーマンの典型の道を歩いたに過ぎない。

しかし、同輩たちと違うのは、もうこの道を引き返すことはできない、ということである。引き返すどころか、他の道に移ることも許されない。

この道から離れようとして、ホノルル行き飛行機に搭乗する寸前に、原因不明の発作で倒れたSという前任者のことが、邦彦の脳裏から去ることはないし、それに、江藤という獰猛なボスの存在も、邦彦を締め付けずにはおかない。

それより、邦彦をとらえている（いや、とらえられ始めようとしている、といった方が適切かもしれない）、もつと得体の知れないものがある。

例えば向かいのビルの屋上の、もう少し上の、薄い雲が流れているあたり。あるいは、このルームの、シャンデリアの光からわずかに遮られた、天井の中央から斜め隅にかけての、うっすら染みの浮き出したあたり。

いつの頃からなのか自分でも気付かないのであるが、なにものかにじっと「見据えられている」気配を、邦彦は感じる。

仕事が、いよいよ山場を迎えようとする頃。一つの仕事が終わって、いまにも崩れ落ちそうになる身を、多量のアルコールでやっとの思いで掬いあげようとしている頃。そんなとき、背中あたりにじつと注がれている、得体の知れないなものかの不気味な視線を、焼け付くほどに感じるのである。

敬三は、三十分ほど遅く起きた。

こんなことはこの数年、めったにないことであったが、昨夜はコンビニエンスストアに勤める北野由美子のことを考えているうちに、段々目が冴えてきて、寝付いたのは、通りに新聞配達のパイクが走り、牛乳瓶の触れ合う音が微かに聞こえ始めた頃だった。

由美子とは、今日レストランで会うことになっている。今回は、敬三が由美子に会いたいと申し出た。

そのことが、敬三の神経を幾分たかぶらせていたのかもしれない。いったい、神経がたかぶり、眠れないなどという気分になるなどと



いうことが、この自分に残されているとは信じられないことだった。眠り足りないせいもあるのか、体がげけだるく、頭の芯がどこかたよりない。

ジョギングシャツに着替えてはみたが、一步を踏みだすのがおつくうである。頭の後ろのあたりに、鈍い微かな痛みがあり、目も腫れぼったい。

一瞬間のことではあるが、敬三は今朝は止めにしようと思った。しかし、何十年と走り抜いてきた体の方が朝の靄を踏み、すでに走り出していた。

走り始めてみると、案外心配するほどでもなく、調子は悪くない。百メートルほど行つたところで、毎朝顔を合わせる三人連れに挨拶し、さらに二、三百メートル行つたところで、町内会の老人会長が散歩しているのに出会い、声をかけ手を振つた。さらに百メートル。そこで、敬三は意識を失つた。

気が付くと、敬三のまわりには五、六人が群れていて、「救急車を呼べ」と口々に怒鳴つていた。二人ほどが、すでに車道を渡つたところにある公衆電話に駆け寄ろうとしていて、「急げ」と誰かが後ろから叫んだ。

「ああ、かまわないでください。大丈夫です。ほれ、このとおり。ちよつと軽い眩暈がただけですから」

敬三は、いうなり立ち上がった。さすがに足元がたよりない感じがしたが、一人で歩けないわけではなかった。

公衆電話までたどり着いていた二人が戻つてきて、敬三の顔を覗き込んだ。「その内科医院にでも診てもらつた方がいいですよ」一人が敬三の腕をとつたまま離そうとしないので、上体を預けた格好で医院まで一緒に歩いた。

風邪などで、数度かかったことのある医師は、「血圧や心電図に異常はないのですが、一度総合病院でちゃんと検査を受けた方がよくはありませんか。お齡でもありますから」といいながら、ビタミン剤程度の薬を一週間分くれただけだった。

医院を出るときは、敬三一人だった。信号を二つ渡ると家が見えてきた。

歩きながら敬三は、「会」のことを思っていた。自分の契約の日が、あと十日に迫っていることは、いわれずとも知っている。

もしかしたら、今朝のことも、あるいは由美子のことだって、会のしわざではないか、と思えないこともない。

それはそれでいい。

敬三の目には、この二十日ほど前から、明らかに会の者と思われる男の存在が、確かに見えている。

それは、書齋に籠もっているときの、玉砂利を遠くで踏む微かな

靴音であったり、壁をよぎるわずかな空気の乱れであったりする。また、ジョギング姿の敬三を、朝靄の底からすくいあげる白い目であったり、K大学構内ですれ違ふときの、なに気ない車のなかからの視線であったりする。

この日がくることは、三年前の秋に会と契約を交わし、契約書に付記まで添えたときから、敬三の胸を離れたことはない。むしろ、絶えずこの日のことを思い、思うことによつて、心の壁のさらにその奥までを覗き込もうとしてきた、といつてよい。

七年ほど前、数えきれないほどあった肩書きのすべてから解放され、敬三は積年の夢であり、まだ緒についたばかりの日本近代経済学史論究のまとめに、余力のすべてを注ぎ込もうとした。

書齋には、集めるだけ集めてまだ目を通していない資料が積み上げてあつたし、地下の倉庫には、近在の旧家や農家などから、自分の足で買い取ってきた古文書の類が、箱詰めのまま足の踏み場もなく並べられていた。

実際、敬三はしばらくの間、憑かれたみたいに資料を読み、古文書の埃にまみれ、宮地式と呼ばれる独特の論法を展開し、かなりのスピードで原稿用紙を埋めていた。この分でいけば、当初の目安としてきた十年を待たずに脱稿の運びになるのではないかと、敬三自身心をときめかせていたのだった。

肩書きは脱ぎ去ったとはいえ、敬三自身、経済学の世界から引退したつもりはなく、知り合いの記者にも、「これから、生涯の研究テーマに、楽しみながらゆつくりと取り組みますよ。できたら、青年時代に志した『文学』とも友達になりたいものです」と話していたくらいである。

記者も、敬三が話したとおり、好意的な記事を夕刊の紙面に、一ページ近くをさいて大きくとりあげてくれたのだったし、学会誌から、敬三の名前が削られ始めたのでもなかった。

どころか、学会誌に「宮地敬三氏の、さらなる斯界への寄与を」という特集が組まれたのはその次号あたりだったし、それには明石やK大学教授の主だったところが、殆ど名を連ねていた。

その他、敬三が目をかけてきた他大学の教授や、財界人たちも同様だった。であるのに、敬三は、どうして自らの心を閉ざす結果に及んだのか。

敬三自身、K大学を退官し、引き続き私立大学で教鞭をとつている間、自ら学界のリーダーであると思つて疑わなかった。勿論、社会の変化や進歩にも柔軟に耐え、十分対応していると胸を張ることができた。

しかし、肩書きのすべてをはずしてしまつたいま、いきなりじか

に太陽光線を目に受けてしまった。そんな自分の、裸のいつわりのない姿を見てしまったのだった。

茫漠とした靄のなかを、もの知り顔に、得意気にゆらめき歩いてくるものの姿。これが、ほかならぬ自分だった。そしてその自分は、目の前を立ち止まることもせず、砂だらけの道を奥へ奥へと一人進んでいく。

明石や後輩の教授たちが、東西という関係が殆ど崩れてしまったいま、現状を冷静に観察、評価し、さらに経済大国化した日本の将来の方向を展望していこうということに熱のこもった議論を展開し、かつて古典派の牙城とまでいわれてきたK大学に、敬三の時代とは異なつた新たな波が生まれつつあることは、敬三も十分知っている。

が、そういうことではない。肩書きや、閥や、論理などでは推し量れない、そういうものではない、なにか。

敬三の周囲を夥しく埋めている、微かなもの。そのものたちの気配。うつろい流れるほどにあやうく、それでいて、実に確かなもの。

例えていえば、秋風。誰もいない、夕暮の野。薄の穂のうねり。

茫漠とした地の果てまで続く、がらんどうの空。しかし、その後ろに重層する濃密なもの、秘かな翻り。

あるいは、気が遠くなるほどにどこまでも澄み通つた風の道の、溢れんばかりの存在。

敬三は唸つた。そして、自らの裸の姿をとり巻くものたちの声に耳を澄ました。じつと目を閉じ、彼らのうちに身を横たえてみた。

彼らは、敬三に向かって呼びかけていた。口々に、さまざまのことで、呼びかけているのだった。懸命に、やさしく、まるで「出口だよ。もう、ほんの少し頑張れば、そこは出口なんだよ」とでもいうかのごとくに。

三年前、敬三は会の存在を知つた。

少しばかり気に掛かることがあつて、W博士の論文を調べていたのだった。W博士は、古典経済学の理論的指導者で、この多様化した現代にあつても、なおカリスマ性を失わない世界的権威である。

その論文の最後に、「許されるべき）自覚死」というのがあり、「もとより、生死のことは、見えないもの」の手にすべてが委ねられており、それを侵すことは、なに人にも許されていない。しかし、近い将来、いや現在においてさえ、社会的にも、医学的にも、これを重要な問題にしなければならなくなるであろう」と明記し、「会」の存在のことが紹介されているのだった。

博士は、会の存在の是非については一言も触れていないが、「見

えないものの手の主には、決して認められることではないであろうが、でき得れば、大いなる慈悲により、そのことを看過して欲しい」こととして、「許されるべき違背」という表現を用い、「だとするならば、もはや生ける脱け殻同然の私自身こそが、なによりその恩恵にあずかりたい」と結んでいるのだった。

世界的に名をなしているW教授ほどの存在が、なぜ会にアプローチする必要があるのか、敬三にその理由がわかるべくもないが、世界的な権威であるからこそ、むしろ必要であるのではないのか、とおぼろげに推測されるのである。

敬三の場合にしても、経済学史家として世間に通用し、自らの実力もそれを十分補える位置につけていた。K大学を退官し、さらに私立大学に勤務してさえ、その地位は揺るがなかった。

七十七歳のとき、妻に先だたれたのが痛くないわけはなかったが、それが敬三の致命傷となるほどではなかった。

子供には恵まれなかったが、それほど遠くないところに実弟が、会社顧問として現役に近いかたちで勤めており、甥や姪や、その子供たちも、あまり離れていないところに住んでいた。

そんな敬三の、ななが変わったというのだったろう。なにも変わっていない。少なくとも、敬三をとり巻く人々や、彼らを包み込む風景については。

しかし、あの長い夜を境に、経済学史家であろうとすることも、一度は知事選に名を連ねようとしたことなども、すべてが自分とは遙かに隔たったものとなってしまった。

―妻の一周忌の法要を終え、集まってくれた身内や知人の二十数人が一人、二人と姿を消し、九時近くには敬三一人が残された。

敬三にとっては、妻が入院していた期間も含め、二年余り一人暮らしを続けてきたし、五十坪の家に一人でいることには十分慣れていた。であるから、つい先刻まで酒臭い息が充満し、煙草の煙にむせかえるほどであった部屋が、急にひっそり閑となってしまったことなど、気にもとめなかった。

弟の嫁や、甥の嫁たちが、膳や食器の一つ一つまで丹念に片付けて帰ってくれたので、敬三に残された仕事といえば、妻に手向けられた線香の後始末をすることぐらいだった。

久しぶりに飲んだコップ二、三杯のビールが効いていて、座っていると、目蓋が石にでもなったのではないかと思えそうな眠気が襲ってきた。そのまま目を閉じれば、妻の遺影の前で、果てしない眠りに落ちそうで、テーブルにすがりつき、やっとの思いで立ちあがると、これも手回しよく弟の嫁がひいてくれた隣の間の布団に、背広もズボンも着たまま転がり込んだ。

いったい、どれくらい眠っていたのだっただろう。気が付いたとき、あたりは闇に包まれていた。それは、いつもの自分の寝室であることが、すぐにそれとは知れないほど、深く濃い闇だった。

明け方にはまだ間があるとみえて、庭の木々の小鳥たちの囀りも、曙光のなかで決まって鎖を鳴らして歩きまわる隣家のシェパードの低い唸りもなく、いまは、まだそれらが空気を揺らそうとする気配さえ感じられなかった。

その闇を横切って、ふと、生温いものが頬を撫でた。

瞬間、敬三は鋭い刃物でいきなり裂かれたのではないか、という痛みを背中に感じて、体をよじり、はね跳んだ。が、跳んだ筈の体が動かない。

あわてて頭の向きを変えようとした。ところが、向きを変えるところか、頭はピクリとも動かない。動転した敬三は、腰のあたりに投げ出している腕を、布団の外に引き摺り出そうとした。しかし、その腕もまるで蝶番の外れた棒である。敬三の心は、懸命に両腕を振り回し、間近に潜む異様なものの脳天に向かって打ちかかっているつもりであるのに、腕を引き摺り出すどころか、指の一本さえ動かない。

足も動かない。口を開くことも、声を出すことも、開いた目蓋を閉じることさえできない。

手や足や指や口には、ちゃんとした感覚が通っているのに、どれ一つ意のままにならない。

動悸が鳴り始めた。枕に触れている後頭部が熱を帯びて膨満し、動悸が高鳴る度に、頭の芯の奥が鋭く痛んだ。

敬三は、苦しい呼吸を懸命に整え、あたりを覆う闇を見据えた。仰向けのまま、いまできることといったら、瞳を凝らし、真上の闇を見詰めることだけだった。

「終り、なのか」

敬三は、奇妙に澄んでいる頭の隅で、次に訪れてくる瞬間のことを考えていた。次にくるもの、それは自分にはまだまだ遠い先のことと思っていた。

七十八歳になる敬三であるが、自分にもやがてその日がくることを頭ではわかっていたつもりでも、一度として現実のものとは考えたことがなかった。

健康には自信があったし、目の前には仕事如山積していた。とくに、三十代半ばに、K大学で最も早いグループに入る教授就任を果たしてからというものの、常にフルスピードで走り続けてきた。

若手の主任教授として、学部長として、経済学史学会長として、K市などから委嘱されるさまざまな委員会の委員長として、あるい

は知事選にかかわる革新勢力の頭脳として、敬三はいつもそれらの中心にいたし、その位置にあることが自然であると、自他ともに認めていた。

疲れるということなどなかった。困難な仕事に当たれば当たるほど、身内にはより強大な力が湧いてきた。実際、敬三が仕事を処理する様は、カミソリで半紙を切断するのにも似ていた。明石たち後輩にも、敬三のその際立った手腕を、数知れないほどまざまざと見せつけてきた。

現実の地域社会が敬三の手のうちで作られ、ときには、敬三の意のままに消されることさえ、幾度となくあったのだった。

とにかく、敬三を遮るものは、殆どないといってよかった。(敬三が、もし金を欲したなら、会社の一つ、二つは起こせるぐらいの金は集まったに違いないし、色を欲したならば、自由にすることのできる女は、両手に余るほどいた筈である)

そんな敬三の、唯一ともいえる興味の対象は、表札の蒐集だった。表札といっても、銀や真鍮や銅製といった上質なものではない。薄いカマボコ板に墨が流れ、字などろくろく読めもしない、といったものである。もともと、表札の主の名などどうでもいいのであるから、雨風に削られ、腐食しかかったものが殆どである。

学会で上京した折、パーティを終えて会場を出、地下鉄を降りて宿舎のホテルに戻るまでの間に、表通りから一つ、二つ入った路地の家の玄関口まで歩き、気いりの古めかしい表札に出食わすと、ひよいと剥がしてカバンに入れる。あとは、なに食わぬ顔で路地を出ていく。

犬に激しく吠えたてられ、ときどきは家人と鉢合わせになり、詰問されそうになったこともあった。

しかし、そのいずれのときも、敬三の身なりや物腰に、家人の方で反対になにか勘違いしたとでも思い直すのか、先方からドアの奥に消えてしまうのだった。勿論、そのとき、表札は既に敬三のカバンのなかに収まってしまっているし、家人の方も、まさか古びた表札に目的があるなどとは考えもしないらしく、それ以上のトラブルになつたことはない。

地方に出張したときにも、K大学の経済学部長として教授会を主催した後や、K市青少年健全育成会で県警本部長を交えた委員会に出席した後など、敬三は一人であらりと路地裏に歩み入るのだった。表札に手をかけようとするときの自分。

敬三には、その瞬間の、総身が栗立つという緊張がたまらない。それは、数百の学生を相手に講演するときの自分や、公衆を前に弁舌をふるうときの自分にはない、血がふつふつとたぎり始める状態にも似た快い緊張と、微かな不安とがないまぜになった、えもい

われぬ確かな手応えを、ひしと感じるのだった。

大学でも、学外でも、謹厳、清廉な姿勢を崩さない敬三に、こんな隠れた性癖があることを知る者は、誰一人いない。五十年近く連れ添った妻でさえ、地下倉庫に積み上げられたダンボール箱に、古文書のほかに、夥しい表札が梱包されていることなど、気付くことも、訝ることもなかった。

この敬三の蒐集癖は、学生時代の、ひよんなことから始まったのであるが、しばらくは忘れていた癖が、最も若い教授として就任した頃から、また蘇ったのだった。

K帝国大学入学と同時に、敬三は学生寮に入ったのであるが、新入寮生歓迎コンパで、かなり酒が入った後、新入寮生たちは町に出て、なにか一つだけめぼしい物を持ち帰らなければならぬことになった。

他人の物を持ち去るといふことは、もともと、たとえ捨てられていた物であっても、敬三にはできないことだった。

しかし、初めて飲んだ酒の酔いもあってか、畑の大根や、川辺に繋いだ小舟の櫓を担いだりして戻る寮生をよそに、川を渡って見知らぬ住宅街に入り込んだ敬三は、一番路地奥の洋館建ての玄関に近付き、激しく吠えかかる数頭の犬の洞間声に身の氷る思いをしながら、頭の高さにある表札を掴むと、闇に沈んだ夜道を泳ぎ、無我夢中で逃げ帰ったのだった。

持ち帰った物の品評会では、敬三が文句なしに一番だった。

表札は、K市域から連続して当選しているY代議士のものであった。

おまけに、Y代議士は現職の大臣でもあったから、

「よくも生きて帰れたな」

「まさか、顔見られんかったやろな」

「明日には、間違いなく両手が後ろにまわるぞ」

などと揶揄する上級生たちのおどけた声を聞きながら、一度に酔いが醒め、体中がわななき震えるのをとめることができず、古びた分厚い桧材に癖のある墨字の流れかけた文字が、威圧するほどに自分に迫ってくるのを、ただ黙って眺めやっていたことを覚えている。

ふっと、闇のなかでなにかが動いた。

すえた臭いが、鼻を打った。

身じろぎもできない敬三の目が、闇のなかで動くものの気配を微かにとらえている。

見ている間に、闇がぐるりと反転し、敬三の頭上に闇の色をもう一つ濃くしたかと思われる、墨色の輪を作った。

と、墨色の輪が透けて、蠢くものの影がだんだんその姿を現わしてくる。敬三は、瞳をいっぱい開いて、露わになってくるものの

姿を見た。

男が座っていた。いや、何万という群衆に囲まれ、両手両足を縛られて、壇上に引き据えられているのだった。

群衆の叫びが、幾層ものこだまとなって、男を責めていた。

「売国奴、偽善者」

「反革命、私服を肥やす異端分子」

「ファシスト」

「人間の面をした獣」

これらの声に続き、「なぶり殺せ」、「八つ裂きにしろ」の叫びとなった。

男は三十年前、この国を異民族の支配から解放し、平和、平等の立憲国家として指導してきた首相だった。それが前夜、自らが創始し、解放までの間、まさに寝食をともにしてきた「解放軍」により捕らえられ、一夜明けたいま、公開の場での刑の執行をいい渡されたのだった。

罪状は、「憲法違反」だった。

国では、独立以来、天候異変による極度の貧困と餓えが蔓延し、おまけに解放軍による恐怖政治が行われていたため、民心はとうの昔に現体制を離れ、デモや、小規模のゲリラ闘争が各地で頻発していた。

首相の護衛兵である解放軍までを離反させたのは、民心を十分説得し得ぬままに進めた老朽化のための官邸の移築と、旧官邸の地下倉庫から発見された、国の年度予算の数十倍にもものぼると目される金塊の出現だった。

首相は、「金塊など、自分は知らぬ。三十年前の傀儡政権の主のものだ」と主張して譲らなかつたのだが、一旦燃え上がった民衆の怒りの火は、もはや消すことはできなかつた。

しかし、敬三には、いま逆エビに縛られ、転がされた首相の胸のうちが痛いほどにわかるのである。というのは、この首相とどこかで間違いなく出会ったことがある、という臆気な記憶が、確かにあるからであった。

「恐怖政治など、意図するところではない。天が、自分を見捨てたのだ。もし、解放の父と呼ばれようとも、売国奴などといわれる筋合いはない。まして、巨万の私服を肥やしていたなどといういいがかりなど」

胸部に、腹部に、夥しい弾丸を浴び、薄れていく今際の意識の底で、首相がとぎれとぎれに洩らすつぶやきを、敬三はまさにいま、自らの痛みとして、しんじつ聞くことができる。

わななくほどに胸を鳴らし、敬三の目が、いまにも張り裂けるの



ではないかといわんばかりに闇の光景に釘付けになっているとき、血まみれの苦悶にひきつれた首相の顔がすつと消え、にわか光が射したかと思うと、ぼんやりと遠い景色の俯瞰図が現われた。

その景色が、一挙にズームアップになる。どこか見たことのある景色だ、と敬三は思った。緑深い山の形。山と山の間には伸びる褐色の道。道に添い、音もなく豊かに流れる川。

川のほとりの集落。立ちのぼる幾筋もの青い煙。カン、と静まりかえった冷たい空気。

朝餉の風景だ、と敬三は思う。しばらくすると、集落の中心である広場に、一人、二人と家々から人が出てき始めた。それが、瞬間に三十人ほどの数になる。

見詰める敬三の目に、それは身震いを催すほどひどく懐かしいもの思えて、いまにも胸が熱く塞がりそうになってくる。とくに、最初に広場に出て、切り株に腰を下ろしている若い男の横顔に、強く惹かれる。人々の身なりは、殆ど素裸同然の態であるのに、男や女たちの表情は、昇る朝日にまばゆいばかりに照り輝いている。

若い男がやおら立ち上がると、空の色に透き通りそうな瞳を煌めかせ、山の端にかかる日輪に向かって、両手をかざし、祈り始めた。

「続べたまう天の父よ、御心のままにわれわれを導きたまえ」

男の祈りは短かいものだった。皆の祈りが終ると、人々は光の渦のなかを笑い合いながら、もとの家に入っていった。が、しばらくすると、弓矢を持った者、木鍬を担いだ者、壺を抱えた者と、次々と広場に戻ってきた。彼らは、数人ずつのグループになり、朝日を背に受け、野へ谷へ川へと歩き出した。

家々では、残った女たちが、肉を煙蒸しにしたり、魚を干乾しにしたりしている。子供たちは、素裸のまま草にまみれ、土にまみれて高い空に歓声をあげる。

敬三は、われにかえると、涙ぐみ、懸命にその光景に向かって呼びかけようとしているのだった。

「わたしは、いま、どうしてここにいます」

敬三は、自分の声を遠くで聞いている。懸命に引き絞り叫ぶ自分の声を、はるかに深い谷の底からの笥のごとくに聞いている。

「どうしてわたしは、いま、ここにいます。どうして、この場に、わたしが」

谷底から、高く低く呟ってくる声は、殆ど絶叫に近かった。

それも、自分自身のその声を、敬三自身が目を細めて聞いている。涙を流し、身動きもならず横たわっている敬三を、数メートルの真上にいるもう一人の敬三が、目を細めて眺めているのである。

それは、奇妙な光景だった。身動きもならず横たわっている敬三も自分であつたし、真上で目を細めている敬三も自分自身であつた。横たわっている敬三にできることといったら、闇に映し出される風景を食いりそうに見詰めているばかりだし、もう一人の敬三は、真下の敬三の熱い息遣いまで数えられるほどであるのに、呼びかけることも、ほんの小さな意志を伝えることもできない。それでいて、二人の自分がどこかで確かにつながっていることがわかるのだった。

邦彦は、錠剤を一気に呷った。広口瓶の底に、五センチばかり残っていた分の半分ばかりを掴み、いきなり呷ったのだから、二十錠ぐらいは飲んだかもしれない。

眠れないのだった。

いや、眠りに入ることは入った。しかし、三十分と経たないうちに目が醒めてしまった。

夥しい汗だった。

天井隅から下りてくる空調の風に、いくらか救われはするものの、身内から吹きこぼれ出る汗は、とどまることなくシーツを染み通らせ、枕を濡れ通らせてしまう。手探りでバッグからとり出した新しいバスタオルは、胸や背中を二、三度拭いただけで、すぐに重くなつた。

邦彦の横には玲子がいる。ウイスキーの酔いと、激しい行為の果ての疲れもあつてか、玲子は、頬や、毛布からはみ出した肩口に邦彦の濡れた体が触れても、ピクリとも動かない。

唇を半ば開き、上気した頬の色をみせて眠っている。肉付きのいい肩から胸へかけて、大きくゆったりした呼吸が波打ち流れ、落ちていく。

玲子と会うのは半年ぶりだった。そのせいもあつてか、邦彦は久しぶりに燃えた。

女のことを考える余裕など、この数か月というもの、殆どなかったから、触れればどこまでも柔かく沈み、それでいて指先をしつとりはねかえしてくる玲子の肌をまさぐっているうちに、激しい衝動が突き上げてきたのだった。

玲子を抱いていると、なにかも忘れることができる。邦彦は、そんな気がした。あと一週間に迫った仕事の期限のことも、闇のなかから射竦めてくる目の存在も、すべて忘れてしまうことができる、と思つた。

玲子は、邦彦にとつていま、唯一、かろうじて足元を揺らさずに立つことのできる地平なのだ、といつても間違いはなかった。

玲子の細くしなやかな、それでいて十分やわらかい体に顔中を埋

めていると、仕事のことや巨大な闇のなかの目のことから、本当に自分を遮ることができているのではないかと思えた。

邦彦は、実際、玲子の胸に顔を埋めているうち、眠りに落ちたのである。ゴミくずみたいに疲れ果てた、それでいて、奇妙に優しい眠りだった。

しかし、邦彦の眠りは、すぐに破られてしまった。

邦彦は宙に放り出され、漆黒の空間を、錐揉み状に落下していた。千メートルも、二千メートルも、息もできないスピードで闇を裂きながら落ちていくのだった。

その目には、はるかかなたにきらめく星々が一つ、二つと微妙にとらえられるだけで、ほかにはなにも見えなかった。ただ、闇のなかに落下するとき、邦彦の皮膚が闇の粒子と激しく擦れ合うのか、奇妙な鼻を突く臭いがあたりに強く漂い始めていた。

熱かった。千メートル、二千メートル、三千メートルと落下していくうちに、皮膚が焼け付き、すさまじい熱を帯びてくるのだった。

邦彦は、もがいていた。果てもなく落ちていく苦しさ、身内を貫く熱気とで、殆ど正気を失いながら、指は懸命に宙を掻いていた。

目覚めたとき、毛布の下の剥き出しの肌は煮え湯を浴びたほどの夥しい汗にまみれていた。汗は、首筋にも、頭髮の根にも流れ、枕が頭の形に沈み込んでいた。

その汗が、拭いても拭いても、吹き上げてくる。いったい、自分の体のどこにこんな多量の水分があったのかと驚くほど、吹き上げてくる。最初、邦彦は、胸のあたりで破れた血管が、激しい鼓動とともに血潮をほとばしらせているのではないかと、錯覚したほどだった。

頭の芯に、なにかを置き忘れたみたいなこだわりがあった。それがなんなのか。ベッドに上体を起こし、じっと思いをめぐらしていると、頭の隅に残っていた燠火がくすぶり始め、そのくせ、手足先の神経はぶつぶつ音をたてて千切れていくのではないかという気配に襲われ、いまにも体全体が弾け、飛び散ってしまいそうな恐れを覚えるのだった。

一息に呷った二十錠が効き始めたのか、いく分気持ちの底が平らになっていくのがわかる。しかし、吹き出す汗はいっこうに勢いを弱めそうにない。どころか、次々に胸板を伝い、肘や指先を伝って、カーペットに音をたてて滴り落ち、闇に吸われていく。

空調が異常をきたしているのではないか、と思った。なにかのミスで、十度ぐらい高い温度にセットされてしまったのだ、と目盛を透かして見た。だが、ベッドの後ろの目盛は、自分以外の誰が触れた形跡もなかった。

部屋の温度は、いつもと同じ二十六度の筈である。換気も正常に

なされていて、指を伸ばせば、規則正しい微風が渡っているのが確かにそれと知れた。

それなのに、邦彦自身は、まるでコントロールを失った浮遊物であった。

漆黒の空間を底知れず落下していくときの、眩暈に似た感触が、いまでも残っており、それが頭を強く締め付けていた。

酸っぱいものが、何度も胸元までのぼってきた。カーペットに垂らした足は、闇のなかでほの白く、細く、たよりなかった。

邦彦は、窓のカーテンを小さく開こうとして、一步踏み出しかけたが、思わず前のめりに転びそうになり、あわてて体を引き戻した。自分を支える足元がたよりないせいもあるが、踏み出した闇が、邦彦を招き込んでいるかのごとくに、一際深い、黝々とした口を覗かせているのだった。

「駄目だ」

邦彦は、呻いた。

今度の仕事は、「間違いない失敗だ」と吐き捨てた。

これまで、一度もしくじったことなどないのに、今回だけはどうにもうまく運ばない。気持を奮いたたせようと、ありったけ手を尽くしてみるのだが、その端からなにかがこぼれてしまう。そんな自分を叱咤しようとすればするほど、いよいよ肝腎の心が萎えてしまう。

もし、失敗だとすると。

前任者のSのことが頭を横切っていく。江藤の鋭い刃を含んだ恫喝が、のっぴきならないものとして、胸を貫き始める。

「会の契約は、地球より重い。これはだ、人間と人間との単なる約束事なんてものじゃなく、天に向かってなすべきものを、代わって会が約束し、履行することなのだ。だから、契約事項を一字、一句たりとも違える行為は、絶対に許されない」

何度も聞かされ、骨身に染みるまで徹底的に覚えさせられてきたことばである。

邦彦には、いま、このことばの意味をゆっくり考えている余裕などない。頭がキリリと締め付けられ、次には、だんだん膨満し始め、しまいには、激しく打つ脈と一緒に、膨らんだ脳髓が破裂してしまいうのではないかという危うさに、かろうじて息を止め、耐えている。

突然、ベッドが鈍い音をたててきしんだ。デスクの上の目覚時計がツツと走ったと思うと、フロア面に落下したらしく、ガラスの飛び散る音を残して闇に沈んだ。

シャンデリアが大きく泳ぎ、天井が鳴った。壁も音をたてて弾け、闇の底に澱んでいた空気が掻き混ぜられ、邦彦の濡れた背中にいち

どきに冷たいものがのぼってきた。

「地震だ」

邦彦は、瞬間棒立になった。そして、窓際のカーテンに向かって走り出そうとした。

しかし、立ち上がったつもりのは、すぐに足元の感覚を失い、ベッドに沿って二、三步横に泳いだだけだった。

邦彦の記憶は、いったんそこで途切れている。いったいどれだけそうしていたのだったろうか。再び気が付いたとき、邦彦はカーペットにうつ伏せに倒れていた。

ベルが鳴っていた。

いつから、どれくらいの間鳴っていたものか、邦彦は知らない。ひよっとしたら、邦彦が倒れている間中、ずっと鳴り続けていたのかもしれない。

邦彦の仕事の進捗具合がはかばかしくないと見た、江藤か会の誰かが、邦彦がベッドの傍にうずくまったのを知って、鳴らし続けているのだろうか。

ベルは長い間息も継がずに鳴り、途切れたかと思うと、すぐさま息を吹き返す。そうして、また何十回というコールになる。

邦彦は受話器ににじり寄り、指にかけたところで、取るのを思いとどまった。

「絶対逃げられない」

その考えが閃いたとき、邦彦の手は、反射的にデスクの上に転がしてある筈の広口瓶を探っていた。残りのすべてを飲めば、あるいは逃れられるかもしれない。そう思った。

しかし、指で触れるデスクの上にはなにもなかった。さして広くはないデスクの上を、指でなぞってみた。

やっぱり瓶はなかった。先刻の地震の揺れで、どこかに落ちてしまったのだろうか。それとも、邦彦の頭が、瓶の置き場所を勘違いしているのだったろうか。

邦彦の体は、震え、わなないていた。

とにかく、体の芯まで冷えきっていた。カーペットに突っ伏している間に、汗みずくになっていた髪の毛も、背中も胸も、部屋の隅に通う冷風にまといつかれ、煮えたぎるほどだった熱を、根こそぎ奪われてしまったらしかった。

歯の根も合わないほどに震えながら、邦彦は、ぼんやりした頭で、なおもデスクの上の瓶を探り、鳴り続けるベルの音を遠く聞いている。た。

「どうしたっていうのお」

後ろで、玲子が伸び上がる気配がした。

玲子は毛布を腰のあたりまで引き下ろし、目を閉じたまま首筋に

かかる長い髪を、邪険に搔き上げている。

「女からなの」

何度も伸びをし、欠伸を噛み殺しながら呟く玲子の口から、強いアルコールの臭いが漂ってきた。

コスモスが風に揺れている。

敬三は、ブレザーのポケットに手を突っ込み、日溜まりを縫い歩いていく。

今年は、コスモスがいたるところに咲いている。公園の一角に、学校の花壇に、駅前空き地に、資材置場の片隅に、舗装道路のわずかなひび割れの隙間にさえ、幾重もの花片を揺らしている。

敬三は、まだ夏の終わりの激しさを思わせる陽射しを体いっぱい受けながら、コスモスからコスモスへと飽くことなく歩いていく。

「一週間経ったら、また、ここでこうして会いたいな」

「ええ」

「できたら、毎週、会いたいな」

「私も、そう思っていました」

「毎週金曜日、午後三時。この店の、海の見える、この席で」

敬三は、ほんのいま別れてきた由美子のことを考えている。

今日の由美子は、これまでのどのときよりもよく笑い、よく喋った。父を亡くして、初めて父が、自分のことをどれだけ思っていたくれたかわかったこと。それは、不相応なほどの保険金や預金を残してくれたこともあるが、なにより、父の書斎の押入れの一番奥にしまわれていた十数冊のノートに、母を失ってから現在までの、生まれつき少し体の不自由な由美子にあてた折々のことばが、ぎっしり書き残されていた、ということなどを瞳を煌めかして喋ってくれた。

しかし、いったいどうして、毎週金曜日に由美子と会う約束などしたのでらう、と敬三は、自分で自分の気持がはかれない。

明日は、自らが会に出向き、あの添え書きまでしたためた「契約の日」なのである。

会の契約は、百パーセントの確率で実行されるというから、明日以降の敬三は、確実にあり得ない。

それは、まさに、厳とした事実である。

敬三は、歩道に揺れているコスモスの淡いピンクの群れから、一本を摘みとった。花弁は、指先につまむと、眩し過ぎる秋の陽射しを弾いて、きりりと敬三の前に立った。

その細い花片は、街の喧騒や埃にも染まらず、敬三の手のうちにいま生まれ出たばかりかと思えるほど、やわらかく、みずみずしく咲いていた。

敬三は、花片に、ふっと軽く息を吹きかけてみた。

何度、通りをめぐったことだろう。

家の玄関が見えるあたりになると、敬三はまた元の道を引き返し、公園を通り抜け、草道の奥にある池の周囲を幾回りも歩く。いつもゴミが澱み、メタンガスが泡をふいていた公園の続きの池の水面には、この頃野鳥が戻り、ときおり鯉や小鮒が浮かび上がってくる。

敬三は、見るともなく鳥たちの様を眺めやる。彼らは、わずかに水面を渡る風に羽毛を逆立てながら、水をくぐったり、水面に漣を落としてゆるやかに飛翔したりする。

敬三はいま、彼らは明日も明後日も、こうして水辺でたわむれているに違いない、と思う。そして、鳥たちだけではなく、花々も、水面を渡る風も、街の風景も、由美子も。

しかし、この自分は、ない。

敬三は、明日以降の自分がどうなりゆくかなど、知らない。そんなことは、自分の考える領分ではないと思っている。

たとえ、どう思い悩んだにしろ、現実の自分には、答えなど見い出せる筈もなく、また、誰からもそれは与えられはしない、ということぐらい知っている。

それより三年前、なぜあれほど自分の考えにこだわりの、どうしてあれほど性急に会に向いたのだったのか、幾度も反芻してみる。

直接のきっかけはW博士の論文によるものであったが、その考えは、自分のうちにとりから存在していた。

刻々と、冬に向かっていく自分。落葉が無い、銀色の薄の穂がなびいているなかを、徐々に徐々にではあるが、日一日と長くなる影を引き摺りながら、真直ぐ冬の道に向かつて歩いていく自分。

敬三の胸のうちにそんな思いがあったことは確かである。

しかし、決定的なことは、そんなことではなかった。むしろ、ふとなに気なく振り返ったとき、薄野のなかを歩いている自分の、その後ろにたなびいている秋風の澄明さ、深さにことばを失ってしまった、といった方が適切である。

K大学経済学部長として、日本近代経済学史学会長として、K市などに関わるさまざまな委員会委員長として、敬三がそのときどきに鈍をふるってきた案件。案件の解決とともに、その背後に押しやられた数々の思惑や事象。

それらの思惑や事象から発せられる、呪咀にも似た念の照射が、いま敬三を縛りつけてやまない。いや、敬三の足跡のそこかしこにうち立てられた数々の功績のうちにさえ、そのときどきに封じ込められた不協和音の穂先が、隙をみては芽を出し、敬三の胸を鋭く抉りとりとうとする。

K 大学名誉教授であり、K 市名誉市民となることで、敬三は、自分の後ろに夥しい迷彩を施した塚を築いてきた。

無数の人々を選別評価し、登用し、あるいは解任してきた。K 大学において、同じ史学に籍を置く者として、最大のライバルだった T 教授を失脚に追い込んだこともあったし、知事選の革新陣営内部における対抗馬と目されていた E 氏を中傷し、結果的には敬三も E 氏も推挙から洩れることになったのだが、このときの E 氏側とのわけがかりは、いまに至っても解けていない。

日本近代経済学史学会では、当時助手であった明石の発案を敬三の論文として発表し、学界に揺るぎのない「宮地式」という考究方式の基盤を築いたのだったし、学部長時代には、わずか二年間のうちに T 教授の失脚を始めとする人事の一新を図り、学部の色彩を強引に塗り替えてしまった。

加えて、表札の蒐集である。「K 市の顔」である筈の敬三が集めた表札の数は、敬三自身見当もつかない。

とにかく、敬三が八十年をかけてなし遂げたことは、自らの膝下に黒い座布団を、一枚、また一枚と積み上げることであった。

四年前、あの長い夜の出来事があった、初めて自分の後ろを恐る振り返つてみたのであるが、黒々とした幾多の風景ばかりが嵌め込まれているものと思っていたのに、あたりを包む空気のみやりの清澄さに打たれ、敬三はことばを失ってしまった。

それ以来、「権威者としての威信」をかけた、自らの集大成ともいべき近代経済学史論究の仕事などに、もはや情熱を傾けることができなくなってしまった。

「会」に向く決心を固めたのは、そういういきさつを経てのことではあったが、一度決心が定まると、もうあとを見る必要はなかった。

いうまでもないことであるが、会の方からの働きかけなど一切なく、敬三自身が会の所在地を探ね、主旨を十分確かめ、自由意志により選択し、出向いたのである。

契約の後、敬三は、憑きものが落ちたかのごとくに目の前が明るくなったのを知った。長い間の呪縛から解き放たれたのだろう、これまで見えなかったものが見え、聞こえなかったものが鮮明に聞こえ始めたのではないかと思えた。

表札の蒐集は、契約以来ぶつくりやめた。他人の家の軒下に秘かに忍び込むという行為こそ、なによりおぞましいことであったし、それは二枚も、三枚もの仮面をつけた、いかにも「K 市の顔」そのものの姿であるからであった。

K 大学をときおり訪ね始めたのは、これとときを一にしている。



K大学の名誉教授室を訪ねることが、明石たちを苛立たせることになることは重々わかっていたが、敬三にとって、自らが重ねてきたことがらの数々を、残された三年、自分なりに振り返ってみるには、これ以上はない場所だった。

特に図書室の書架のバックナンバーの揃った研究論集の背表紙には、敬三の辣腕ぶりを十二分に示す証左が、金文字でまざまざと刻まれている。

それは、まぎれもない自分の「業績」であり、K市の顔としての足跡でもあった。

敬三は、コスモスの花卉を元の花群にそつと戻した。

花卉は、他の幾重もの花卉たちに支えられ、しばらく揺れていたが、光を煌めかせ、一陣の風が吹き抜けると、殆ど目につかぬ素早さで、すつとその姿を消してしまった。

これが明日の自分の姿なのだ、と敬三はポンと弾かれる思いだった。

自らが自らのことを約した日。その日が、明日に迫っている。

それは、まがうことなく自分の意志によるものであるから、迫っている、などといういい方は適当ではないが、会に出向いた日からまるまる三年の月日が流れ、まさに明日が最終契約履行の日、ということになる。

契約書には、「実行の日は、××日まで」という表現で記載されていたから、敬三の身になにかが起こるのは、残された、今日か、明日のいずれかである。

そのくせ、敬三は、由美子と来週も、再来週も、そのまた翌週も会う約束をした。

由美子に会っていると、敬三は、おかしいほど素直な自分に気付いた。それは、由美子のもつ、例えようもないやわやわとしたものに包まれ、身も心も、のびやかになるのを感じるから、であるのだろう。

ひよつとしたら、敬三は、由美子のうちに、一人の異性を意識し始めているのかもしれない。

いつの間にかそんなことを考えている自分に気付き、次の瞬間、バカなことを、と吹き出してしまう。

「バカな」

敬三はそう呟き、コスモスの群れに戻した花卉を、もう一度手にとろうと屈み込んでみたが、あの摘みとられてしまった花卉は、花群のなかにも、根元のあたりにも、アスファルトに散り敷いた落葉のなかにも、どこにも見つからなかった。

山の端を昇りつめた太陽が、厚い雲の間から薄い条光を放ち、海面を射始めた。

朝靄の底に沈んでいた海面は、そこだけがぼうつと明るみ、青ざめて少し苛立った波頭を立てている。

とうとう「その翌日の朝」、がやってきた。

邦彦は、むくんだ目を幾度もしばたかかせ、まだ黒いシルエットに包まれたままのビルのかなたに、遠く広がる海を見ている。

窓際に佇み、ビルの向こうを眺めやっっているうちに夜が明けてしまった。一睡もしなかった。

邦彦の胸を、これまで経験したことのない茫々とした思いが横切つていく。この九年、一度だってこんな思いにとらわれたことはなかった。

百パーセントの確率、といわれた会の仕事を、いま自分が、恐らく初めてしくじった、ということになる。それにしても、邦彦は、契約最終日の昨日から今朝にかけて、自分が金縛りにあったのだろうかと思われるほどに、動けなかったのは何故なのかと考えている。

あらかじめ、敬三のことは十分過ぎるほど調査をし、いつでも計画を実行できる手筈を整えていた。それが、いざ実施という段になると、決まって邪魔が入った。K大学構内で接触しようとする、敬三の後ろから息を弾ませた明石の秘書が駆けてきて、敬三の荷物らしいものを乱暴に押し付け、小走りに去る。

秘書が去った後、次のタイミングをはかっていると、敬三は急になにかを思い出したという恰好で、元の建物にあわてて引き返していく。

敬三が自宅の書斎に籠もっているのをみはからって、勝手口から忍び込もうとすると、めったに現われない町内会長が、パイプをくわえ、裏口から顔を見せる。と思うと、近所に住む弟嫁が布巾をかぶせた盆を持ち、勝手口をくぐる。

夕方になると、敬三はコンビニエンスストアに顔を出すのであるが、朝食用の買物のためというより、由美子とことばを交わすために足を運んでいるのだろうと思われる。それはこの数日、敬三の表情を細かく観察していると、段々上気していく様で、よくわかった。

邦彦は、この由美子の出現以来、仕事に不手際が目立つようになって、と思えてならない。これまで、邦彦が手がけてきた仕事の場合、契約者は日増しに個人としての臭いや殻を脱ぎ捨て、次第に無色、無臭の存在に近付いていくのだったが、敬三の場合は、日を加える毎に、以前の、いや以前より数段若々しい血の色をとり戻しつつあるのではないか、とさえ思われるのだった。

それに、今度の仕事では、自分にも問題がある、と思っっている。ホテルの自室の天井の隅のあたりになにかが潜んでいて、自

分を見ている。その目が、昼も夜も、じっと邦彦を見詰めている。あまりの気味の悪さに寝付けず、ウイスキーと一緒に錠剤を流し込み、ようやく眠ったと思ったら、夢にまでしのび込み、体にのしかかるほどに重くにじり寄ってくる。いったい幾度、胸苦しさに毛布を跳ねとばし、濡れとおるほどの寝汗にみまわれたことだったか。ともかく、今度の仕事は、結局、なに一つ手出しをしないまま、という結果に終わった。

これまで、夥しい錠剤の助けを借りてではあるが、倒れ込みそうな体を引き摺りながら、どんなときでも、完璧に目的を果たしてきた。そんな邦彦の手腕のほどは、江藤でさえも一目置くほどで、もともと政財界などの重要人物が対象の場合、殆ど邦彦に白羽の矢がたてられてきた。

それが、気を抜いたわけでもないのに、最も安易な部類に入る宮地敬三に対する仕事を、しくじった。しかも、完遂率百パーセントを誇る会の実績を、会のなかでも最も秀逸である筈の邦彦が汚してしまった。

邦彦は、しらじら明けていく窓の外の風景を眺めやりながら、一番深く靄の漂っているあたりの、古びてはいるがしつとりした和風の佇まいをみせている敬三の広い家を思い、この時間にはもう起き出し、ジョギングのための準備運動でもしているであろう敬三の、健康そうな肌の色を思った。

と同時に、そこから数キロ離れたアパートでは、コンビニエンスストアに出勤するために、少し不自由な左足を引き摺りながら、仏壇の父の位牌に手を合わせ、朝食の支度にかかっている筈の、由美子のことを考えていた。

邦彦は、雲の間を抜けて出た朝日に一際強く照らされ、しらしら光る海面を見、ガラスに街中の風景を映し出している正面のビルの、一夜の露に洗われたかと思える真新しい様を目にしているうち、これでよかったのかもしれないと、思い始めた。

敬三の、由美子に出会う度に血の色を増していく様子。あれは、もはや契約者のものではない。

由美子の方は、突然のうちに失った父の面影を敬三に見ているふしがある。もつとも、由美子にしても、いまの敬三には、父の最後の頃とは異なった微妙な変化が生じていることを、敏感に感じとっているに違いない。

邦彦は、いまの自分は前任者のSとは違う、と考える。決して、逃げもしなければ、恐れも、隠れもしない。

「これでいい」

そういいきると、胸のうちに不思議な力が湧き、体の奥底のあたりが軽やかさに充たされていくのを感じた。

そのとき、邦彦の後ろのベルが、けたたましく鳴り始めた。邦彦には、電話の相手が誰であるか、受話器をとらずともわかった。知らぬふりを決めこむつもりなどないのだが、もうしばらく、いまの軽やかな気分に浸っていたかった。

ベルは、十五回、二十回と鳴り続ける。一度止んだと思ったら、また十回、二十回と繰り返す。

邦彦は、いつまでも鳴り止まない机上の電話をじっと見詰めていたが、「これでいいんだ」と、もう一度呟くと、弾みをつけて受話器を掴みとった。

「やったな」

田村だった。

「やっぱり、お前の手際にはかなわねえ」

邦彦には、なんのことかわからなかった。

「朝刊、見たぞ。しかし、昨夜八時。記者のやつ、よく臭ぎつけやがったな」

邦彦は、そこまで聞くか聞かないうちに、受話器を放り出し、ドアまで駆け飛んだ。

一面の左上部に、太字の見出しがあった。 // 元日本近代経済学史学会長、宮地敬三氏、事故死”

邦彦は、ページを繰る指ももどかしく、新聞を引き千切らんばかりに開いた。

「K大学名誉教授の宮地氏が、自宅近くの国道を横断中、百キロを越えるスピードで暴走してきた車にはねられた。宮地氏は、全身を強く打ち、内蔵破裂で即死。K署では、逃走した赤い乗用車の行方を追っている。死亡した宮地氏は、K市名誉市民。近くのコンビニエンスストアに出かける途中”

邦彦は、自分の体中の血という血が、いちどきにすべて噴出してしまおうのではないか、と思った。

「なんとということが」

と、あとのことばを探そうとするのだが、浮かばない。

窓辺にもたれたまま、邦彦は、突然、目の前の風景が、支離滅裂な動きで、支離滅裂な色や光を放ち始めるのを、呆けた表情で眺めながら、自分の指が朝刊をズタズタに裂くのにも気付かず、立ち尽くしていた。

(了)